

# 「欠史八代」について（上）

前之園 亮 一

## はじめに

埼玉県稲荷山古墳より出土した鉄剣の銘文の発見は、いわゆる「欠史八代」（以下八代と略称する）の实在性について改めて大きな関心を呼びおこした。それは銘文中の「意富比埜」なる人名が、第八代孝元天皇の皇子大毗古（大彥）という『記紀』の人名と一致し、両者は同一人物である公算が低くないからである。実際、銘文の意富比埜を『記紀』の大毗古と同一人物とみなして、皇統譜の信憑性や八代の实在を強調する意見が現われている。私も意富比埜すなわち大毗古である可能性は高いと思うが、だからといって皇統譜上その父といわれる孝元天皇の实在、ひいては八代の实在までも証明できる論拠となしうるであろうか。小論では、こうした問題も念頭に置きながら、「欠史八代」の和風諡号の考察を中心に、后妃、宮居などについて述べてみたい。

その前に先学の諸説を簡単にふりかえってみよう。八代についての諸説は、A肯定説、B否定説、C一部肯定説、D神名説の四つに分類できよう。Aの肯定説は、八代の可信性を否定的にみるにはおよばないという意見から、積極的に認めようとする説まで幅が広い。たとえば、坂本太郎氏（『日本史概説』上）、庄司浩氏（『帝紀の成立についての一考察』）<sup>（1）</sup>などは、八代の帝紀の構成形態がかなり特異な性格を有しているの、八代には何らかの根拠があるのだらうといわれる。これはかなり一般的な見解である。それをさらに押し進めて、神武および八代の实在を積極的に主張するのが後者の説であり、葛城王朝説を唱える鳥越憲三郎氏（『神々と天皇の間』）の説はその典型である。林屋辰三郎氏（『日本の古代文化』）も、葛城王系は開化天皇の代に崇神天皇によって大和を追われて南山城へ退居したが、その後裔は難波に進出して応神王朝を開いたといわれる。最近では、田中卓氏（『古代

天皇の秘密」が、荷稻山古墳出土の鉄剣銘を論拠にして、『記紀』の八代の系譜の信憑性を強調されている。

Bの否定説は、大正一三年の津田左右吉『古事記及日本書紀の研究』の見解にみられる。津田は仲哀天皇以前の歴代の名は実名ではなく、欽明朝頃に定められたものであらうと述べている。津田は八代の実在性については直接ふれていないものの、実在を疑っているように受けとれる。ついで昭和一〇年に肥後和男氏『大和開闢時代の一考察』は、八代は古代的思想の産物であることを強調し、八代の諡号の下半部のスキトモ、フトニ、オホヒなども実名や古伝ではなく、県主系の后妃記事も史実として信用しがたいことなどを指摘されている。戦後まもなく、長野正氏『帝紀構成上の傾向とその問題』<sup>(3)</sup>は、八代の諡号・后妃・皇居などの差異に着目して前五代と後三代とに分け、まず前五代がつくられ、のちに後三代と接合されたことをかなり詳細に論じられた。ついで水野祐氏『増訂日本古代王朝史論序説』は、和風諡号の研究にもとづいて、八代の諡号にはタラシヒコ・ヤマトネコなど七・八世紀の天皇の諡号に使われている美称が含まれているから、八代の諡号は天武朝以後の創作であると論じ、さらに『記』の崩年干支の有無に注目して、推古天皇までの三三代のうち、八代を含む一五人の天皇には崩年干支の記載がないので、この一五人の天皇は架空の天皇であると主張された。

笠井倭人氏『記紀系譜の成立過程について』<sup>(4)</sup>は、『記

紀』の婚姻形態に注目し、開化以前の皇統譜は天武朝の婚姻形態を土台にして創代されたものであることを明らかにされ、小川徹氏『記紀開化以前八代系譜の成立』<sup>(5)</sup>は、八代の系譜は前二代と後六代の二つの部分から構成され、六世紀中葉に前者に後者が接合されて形成されたものであり、史実性からはほど遠いと結論された。

次に直木孝次郎氏『県主と古代の天皇』<sup>(6)</sup>は、畿内の県・県主と同じ名の皇子・皇女が天武朝に多いことを論拠にして、内廷と関係の深い県主と天皇家との乳母関係が、県主系出身が大部分を占める八代の后妃記事に反映されたと主張され、井上光貞氏『神話から歴史へ』日本の歴史Ⅰは、八代の諡号の上半部のヤマトネコなどは八世紀初頭につくられ、下半部のフトニ・クニクルなども実名ではありえず、八代は帝紀のできた継体―欽明朝に創作された天皇であり、『記紀』編纂のころにもう一度荘重化されたと述べられた。

最近では、原島礼二氏『神武天皇の誕生』が、八代の諡号は五行説と讖緯説をもとにして『記紀』編纂時に造作されたものであり、后妃記事も首皇子（聖武天皇）の立太子を達成するために、藤原氏より下位身分の県主系の后妃所生の皇子でも天皇になった八代の系譜を創作して、新興貴族の藤原氏所生の首皇子の立太子の正しさを国家の正史の中で主張する目的でつくられたという見解を提示されており、小林敏男氏『所謂「欠史八代」における県主后妃記載』<sup>(7)</sup>は、后妃記

載は服屬型神婚説話ともいふべきもので、現実の婚姻關係を反映したものでなく、天武・持統朝ころに『記紀』に定着したといわれている。

Cの一部肯定説について述べる。上田正昭氏(『大王の世紀』日本の歴史2)は、八代とはいっても、前五代と後三代とは諡号・后妃・宮居などの面で明らかに差異がみとめられることを重視し、それは『記紀』編纂時にすべてを恣意的に造作したものではなく、その差異の生ずるに至った原伝承・原記録に違いがあったことを物語ると述べられた。上田説を八代のすべてを虚構とはみていないというふうに読みとると、一部肯定説として位置づけることができる。ただ、上田氏は八代のなかに實在可能な天皇も含まれている、という明言はしていない。次に黛弘道氏(『古代王朝交代論』<sup>(8)</sup>)は、八代の諡号のなかにはスキトモ、フトニ、クニクル、オホヒヒなど実名らしいものや、カムヌナカハミミ、シキツヒコタマテミ、ミマツヒコカエシネなど、実名をもとにしたより素朴な諡号とみられるものが含まれているので、八代を全く架空として、等しなみに扱うことはできない。上田氏が指摘されたように、内容を吟味して八代の間に差異を認め、實在の可能性ある天皇を認めてもよい。ただし、架空の天皇も含まれているから、それととりあわせて系譜に記すとき、七世紀以後の知識で、父子直系相統にまとめられたと論じられた。黛説は肯定説にみられがちな無批判的面、否定説にみられがち

な武断的面を排除して、慎重に組立てられた論であるだけに、説得性に富む見解であるといえよう。

Dの神名説にうつる。岡田精司氏(『記紀神話の成立』<sup>(9)</sup>)は、八代の諡号は通説のように七世紀後半につくられたのではなく、古い時期に何らかの神觀念や神名などをもとにしてつくられたものである。孝昭のカエシネはすぐれた稲を讀えた名であり、孝安のクニオシヒトはその兄アモオシタラシヒコとならべると天オシ・国オシとなり神話的命名が感じられ、孝霊のフトニのフトはフトマニなどの宗教的な用語に冠せられることが多く、孝元のクニクルは国引き神話を思わせるので、八代の諡号は神名として再検討する必要があると提言された。近年、鈴鹿千代乃氏(『欠史八代』の意義)<sup>(10)</sup>は、八代の諡号に国生み神話が内包されていると指摘されているが、鈴鹿説も神名説の一つとみてよいであろう。

ところで、この神名説は否定説の一部に含めることもできるかもしれないが、実は両者は根本的に異なった見解である。否定説は、八代は架空の天皇すなわち架空の人間であるとみているのにくらべ、神名説では八代は神々の一部と考えている。つまり前者は八代を架空とはいいつつも人間的存在と理解しているのに対し、後者は八代を神的存在であると観じている点が根本的に違っている。したがって、神名説は否定説と一線を画する一説として区分できると考える。これから述べようとする愚見は神名説に立っている。神武および八

代は、古い神名をもとにして作られた神的存在であり、精霊や神々の一部であるという観点に立つと、その諡号、后妃（その名前特色や県主系が多いという特徴）、宮居（倉城に集中しているという特徴）などの問題をかなり合理的に説明できる。

従来の諸説は、八代を現在の天皇（人間）、もしくは架空の天皇（架空の人間）という枠のなかだけで論じていたが、小論では「欠史八代」すなわち天皇（人間）という固定觀念の枠をとり払って、八代を精霊や神々の世界に連れ出し、精霊の仲間・神々の一部として観察してみようと思う。

## 一 和風諡号

まず、和風諡号の研究方法について述べておきたい。これまでの諡号の研究は、水野氏の研究に典型的にみられるように、諡号をアメ、トヨ、ヒコ、ワケ、ヤマトネコ、タランなどの構成要素別に分類し、それにもとづいて歴代の諡号を相互に比較検討するという方法が主流を占めてきたといえる。

これは勝れた方法であるが、諡号という枠のなかだけでの考察にとどまり、他の人名との比較検討が十分でなかったように思われる。天皇の諡号といえども、古代人の人名から超越した存在ではなくその一部にすぎない。諡号も古代の人名の一つとして、他の多くの人名の特徴と比べながら観察する必要がある。なかでも神代の延長線上に位置する開化以前の九

代の諡号は、神名との比較研究が不可欠であると考える。

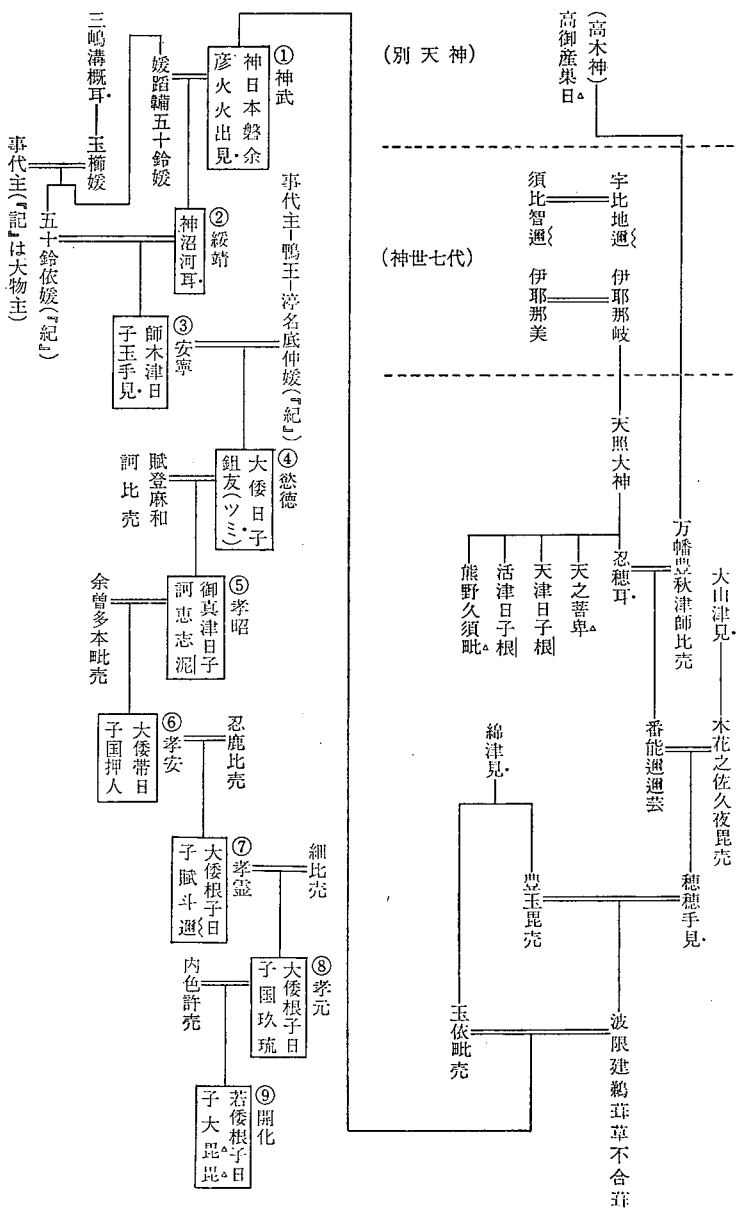
### （一）神武天皇と八代の諡号の特徴

神武から開化までの九代は、神代との紐帯が濃厚に残存しており、その点崇神以下の歴代と一線を画する存在である。そのことは左の系図に明らかである。

この系図について説明すると、神武は綿津見神の外孫、綏靖は三島溝檣耳神の曾孫にして大物主神（『紀』では事主代神）の外孫、安寧は事代主神の外孫、懿徳は事代主神の曾孫というふうに、第一代から第四代までは系譜的に神代と直結している。神武と綏靖の諡号に「カム」という神的存在を意味する語が冠せられているのは、神の孫であるからにはかならない。このような特徴は、今さら強調するまでもなくしげしば指摘されてきたことであるが、左の系図のなかにはそれ以外にも次のような重要な特徴がみられる。

神武ホホデミ、綏靖ヌナカハミミ、安寧タマテミのミ（甲類）やミミ（甲類）、孝昭カエシネ、孝霊フトニのネやニ、開化オホヒヒのヒ（甲類）は、いずれも神名の末尾にも付されている。これらのミ、ミミ、ネ、ニ、ヒなど、名の末尾につけている語に注目すると、神武以下九代は、神代と一つづきの系譜のなかに位置していることは明白である（懿徳のスキトモのトモはツミの音転とみれば、ミを含む例に加えることができる）。孝安のクニオシヒトと孝元のクニクルには、

〔系圖一〕



ミ・ネヒなどは含まれては無いが、クニオシヒト・クニクルは国生み神話や国引き神話が内包された名であろう。

このように神武と八代の諡号の末尾や下半部には、神名に特有な語または神話が含まれており、これは崇神以下の歴代の諡号にはみられない特徴である。この特徴は神武と八代の諡号は、人名風であるというより神名風であるということの意味しているのである。その点、八代の諡号は神名として再検討すべし、という岡田氏の提言はまさに至当であるといえよう。

## (二) 神武天皇の諡号

神武<sup>1)</sup>神倭伊波礼毗古、神日本磐余彥火火出見(前が『記』後が『紀』の表記、以下同じ)、綏靖<sup>2)</sup>神沼河耳、神淳名川耳、安寧<sup>3)</sup>師木津日子玉手見、磯城津彥玉手看の三代の諡号は共通性がある。それはいずれも末尾にミという語がついていることである(ミミはミを重ねて意味を強調した語)。このミについて論じる前に、神武の「亦名」という若御毛沼・豊御毛沼、「年少時之号」という狭野についてふれておきたい。

若御毛沼、豊御毛沼、狭野のワカ、トヨは美称、ミケは食物を意味する語、サは稻を表わす語であるが、末尾のヌやノ(甲類)はいかなる語であろうか。左表は名の末尾にヌ、ノのつく神名と人名を列挙したものである。なお、名の末尾という意味は、神名や人名から神、命(尊)、天皇などの称号

をとり除いた残りの部分の末尾をさす。また表にとりあげた神名、人名の選択の基準は、神、命(尊)、天皇などの称号をとり除いても、残りの部分で神名、人名として十分独立できるものだけを対象にした。

溝口睦子氏によると、「ノ(甲類)とヌはしばしば交替するのでこれらは全て同一語とみて差支えない」といわれる。

〔表1〕にみられるごとく、ヌとノは多く神名の末尾についている。人名の末尾につく場合でも、その人名はきわめて古い時代に分布しており、しかも天皇家や国造の祖先の名であって、人名とはいっても半神的存在である。このヌ、ノをはじめ、チ、ミ、ネ、ヌシ、タマなど神名・人名の末尾につく語について溝口氏にすぐれた研究があり、小論は溝口氏の研究に負うところが少なくない。溝口氏は、ヌ、ノ、チ、ミ、ネ、タマなどは古い神霊観や自然観を意味する語であり、より古い時代にはあらゆる神霊観や自然観を「神」という概念でもって一括して表現する思想はなく、すべての神霊観や自然観をカミという言葉と神という字で統一的に表現する「神」概念の成立は、六世紀後半以降のことであるといわれる。それぞれ個別的な特定の神霊観や自然観を内包するヌ、ノ、チ、ミ、ネ、タマなどの意味内容の一つ一つ明らかにし、「神」概念が新しい時代の産物であることを論証された溝口氏の研究は高く評価されるべきである。

ところで、問題のヌとノについて、溝口氏は次のように述

「欠史八代」について

〔表1〕 ス、ノ（甲類）を末尾に含む神名・人名

〔神 名〕

番号	古 事 記	日 本 書 紀
1	豊雲野神	豊樹淳尊，豊組野尊，豊香節野尊 豊鬘野尊，葉木国野尊，見野尊
2		清之湯山主三名狭漏彦八嶋篠 清之湯山主三名狭漏彦八嶋野
3	布波能母遅久奴須奴神	
4	布怒豆奴神	
5	淤美豆怒神	
6	天之冬衣神	

〔記紀にみえない神名〕

番号	神 名	出 典	備 考
7	天降天牟久怒命	国造本紀	伊勢国造の祖
8	筑陽坐乗志美氣濃神社	神 名 帳	出雲

〔人 名〕

番号	古 事 記	分 布	日 本 書 紀	分 布
1	御毛沼命	神 代	三毛沼命，三毛入野命	神 代
2	若御毛沼命	々	稚三毛野命	々
3	豊御毛沼命	々		
4			狭野	神 武
5			鸕鷀淳	崇 神

〔記紀にみえない人名〕

番号	人 名	分 布	出 典	備 考
6	遷狛一奴	不 明	国造本紀	二方国造の祖

〔表2〕 ミ（甲類）・ミミ（甲類）を末尾に含む神名・人名

〔神 名〕

番号	古 事 記	日 本 書 紀
1	大山津見神	大山祇神
2		山祇
3	閼山津見神	閼山祇
4	正鹿山津見神	正勝山祇
5	淤騰山津見神	
6	奥山津見神	
7	志芸山津見神	雛山祇
8	羽山津見神	麓山祇
9	原山津見神	
10	戸山津見神	
11		中山祇
12	大綿津見神	
13		少童命
14	底津綿津見神	底津少童命
15	中津綿津見神	中津少童命
16	上津綿津見神	表津少童命
17	意富加牟豆美命	
18	正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命	正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊
19		熊野忍踏命, 熊野忍隅命
20		天大耳尊
21	稻田宮主須賀之八耳神	稻田宮主簀狹之八箇耳
22	天津日高日子穗穗手見命	彥火火出見尊, 火折彥火火出見尊
23	八島土奴美神	
24	布帝耳神	
25	鳥耳神	
26	鳥鳴海神	
27	国忍富神	
28	速甕之多気佐波夜遲奴美神	
29	比比羅木之其花麻豆美神	
30	多比理岐志麻流美神	
31	美呂浪神	
32	布忍富鳥鳴海神	
33	天日腹大科度美神	



「欠史八代」について

番号	古 事 記	日 本 書 紀
34	大香山戸臣神 香山戸臣神	海神
35		
36		
37		三嶋溝檝耳神

〔記紀にみえない神名〕

番号	神 名	出 典	備 考
38	御穂須須美命	出雲風土記	島根郡美保郷
39	都久豆美命	々	島根郡
40	波多都美命	々	飯石郡波多郷
41	伎自麻都美命	々	飯石郡来嶋郷
42	穂高見命	姓 氏 録	安曇宿禰，安曇連の祖
43	天戸間見命	々	国造の祖
44	吾田片隅命	々	和仁古の祖
45	天櫛耳命	々	日置部の祖
46	君積命，枳弥都弥命	々	大村直の祖
47	天由久富命	々	額田部宿禰の祖
48	加夜奈留美命神社	神 名 帳	大和国高市郡
50	南方刀美神社	々	信濃国諏訪郡

〔人 名〕

番号	古 事 記	分布	日 本 書 紀	分布
1			神日本磐余彦火火出見尊〔神武〕 磐余彦火火出見尊，彦火火出見尊	神武
2	多芸志美美命	神武	手研耳尊	々
3	岐須美美命	々		
4	神八井耳命	々	神八井耳命	綏靖
5	神沼河耳命〔綏靖〕	綏靖	神淳名川耳尊	々
6	師木津日子玉手見命〔安寧〕	安寧	磯城津彦玉手看尊	安寧
7			息石耳命	々
8	和知都美命	々		
9	比古由牟須美命	開化	彦湯産隅命	開化
10	陶津耳命	崇神	陶津耳	崇神
11			奇日方天日方武茅渟祇	々

番号	古 事 記	分布	日 本 書 紀	分布
12	飯屑巢見	崇神		
13	玖賀耳之御笠	々		
14			武諸隅，大母隅	崇神
15	岐比佐都美	垂仁		
16	前津見	応神	太耳，前津耳	垂仁
17	御組友耳建日子	景行		
18			猿大海	景行
19			依網吾彦男垂見	神功
20			田袋見宿禰	々
21			豊耳	々
22	菅竈由良度美	応神		
23	奴理能美	仁徳		

〔記紀に見えない人名〕

番号	人 名	分 布	出 典	備 考
24	豊御富	神 武	姓 氏 録	吉野連の祖
25	彦八井耳命	々	々	茨田連等の祖
26	大賀茂都美命	崇 神	々	賀茂朝臣の祖
27	大耳	景 行	肥前風土記	小近嶋の土蜘蛛
28	垂耳	々	々	大近嶋の土蜘蛛
29	伊香刀美	々	近江風土記	伊香郡与胡郷
30	味耳命	々	姓 氏 録	久米直の祖
31	千速見命	々	々	長谷部造の祖
32	梨富命，那志，登美命	々	々	川跨連の祖
33	忍凝見命	々	国 造 本 紀	筑波国造の祖
34	邇伎都美命	々	々	穴門国造の祖

らべている。「ネとノは何らかの近親な関係にある呼称」で、「共にほぼ同時期、同地域の首長級の人達の呼称」であり、「ノは特に出雲に關係の深い呼称」であって、「――ノ神」は「自分達の首長をノとよぶ人達によってつくられた神名」である。<sup>(13)</sup>溝口氏はノ(ヌ)が首長の呼称であることを強調されているようだが、前に指摘したように、ヌとノは神名につくことが多いのでむしろ神名に特有な語で、ネよりも古層の神靈觀を表わしている語ではないかと考える。人名の末尾のノ、すなわち神武の亦の名・幼名というミケヌやサノは、ミケ(食物)、サ(稻)の精靈を意味する名で、人名とは考えがたい。ミケヌと同名の神社(8筑陽坐久志美氣濃神社)の存在を考え合わせると、ミケヌは神名とみた方が適切である。ただし、ヌやノが祭祀性濃厚な首長や巫覡の呼称として使用されたことはあったであらう。

三品彰英氏が神武の異名のミケヌ・サノは「稻作りにもとづく神話的な名」<sup>(14)</sup>であるといわれているように、ミケヌ・サノは何か穀霊的な存在を表わしている。とにかく神武の異名というものは人間の名ではなく、神名であると見てよい。同じことは、神武のもう一つの異名であるホホデミについてもいえるのである。

さて、本題にかえて、神武・綏靖・安寧の諡号に共有されているミについて述べよう。

右表にみられるように、ミとミミは神名における用例が人

名におけるそれより少し多い。神名のなかではヤマツミとワタツミの用例が特に多く、このことはミが山や海其自然觀と深い關係にあった語であることを物語っている。ミはもともと山や海など自然の精靈を意味するものではなかったであろうか。人名における用例も少なくないが、古代のなかの古代ともいえる仁徳以前の人名に集中的に分布していることは注目してよい。

このミについて溝口氏は、「神秘な力をもったもの、奇しい力をもったもの、といったような意味の語」で、「巫を意味する一種の神靈觀」であり、三、四世紀を中心とする時代に各地の首長の称号として成立したものであるといわれている。<sup>(15)</sup>氏の説かれたように、ミは古い神靈觀を表わす語であると同時に、人名の末尾について首長の尊称ともなっている。10陶津耳(陶は和泉国大鳥郡の地名)、13玖賀耳之御笠(玖賀は丹波国桑田郡の地名)、15岐比佐都美(岐比佐は出雲国出雲郡漆沼郷の地名)、38伊香刀美(伊香は近江国伊香郡)など、地名にミやミミのつく人名がそれであり、これらはその土地の首長、支配者の尊称であろう。また『魏志』倭人伝に投馬国の「官」名としてみえる弥弥・弥弥那利は、ミミ(美美・耳)と同語とみてよく、「官」名とはいっても実際は首長の尊称であろう。ミミは三世紀の首長の尊称として使用されていたのである。

それでは、神武・綏靖・安寧の諡号のミ、ミミは神名の末

尾としてのミ、ミミなのか、それとも人名の末尾として首長を意味するものであろうか。私は前者であると考える。

神武のホホデミ、綏靖のヌナカハミミ、安寧のタマテミが、「地名ナミ（ミミ）」という構造であるならば、首長の名である可能性が高いといえるが、ホホデ、ヌナカハ、タマテは地名ではないから、首長名や人名とはみなしがないのである。

まず、神武のホホデミについて述べよう。ホホデミは神武の「諱」（神武即位前紀）であると記されているが、他方では神日本磐余彦火火出見尊（神皇承運章、第二・第三の一書）というふうに、あたかも諱号の一部のごとく扱われている。

火火出見はホホ・デ・ミに分けられる。ホホのホは、火の意味ではなく、稲穂を指していることは、左の系図より明らかであろう。また、ホを稲穂と解すると、先に述べた神武の異名のミケヌ・サノが食物や稲の精霊を意味していることとよく合致するのである。

#### 〔系図Ⅱ〕

天之忍穂耳——番能邇邇芸——穗穗手見——フキアヘズー

——火火出見〔神武〕

次にホホデミのデとは何か。火火出見のデは穂穗手見、師木津彦玉手見のテと同語であろう。左表はテ、デを末尾に含む用例を列挙したものである。

右の表よりテ、デは神名につくことは稀で、ほとんど人名

につき、人名のテの分布は仲哀以前と雄略以後に二分できるが、後者に集中しているということがわかる。それではテはいかなる語であろうか。

仲哀以前の人名のテのなかには、首長の尊称としてのテが含まれていると思う。たとえば、七五十跡手のテがそれである。五十跡手は伊賀県主の祖であり、その名は「地名（イト）ナテ」という構造になっていて、個人の名というよりは伊賀の首長を意味する称呼のようである。首長の称呼は地名の下にヒコやヒメなどの尊称をつけて呼ばれることが多いが、五十跡手のテはまさにヒコ・ヒメなどと同じ尊称としての働きをしているのである。さらに邪馬台国の「官」名で奴佳鞮というものが『魏志』倭人伝にみえているが、奴佳鞮の「鞮」は五十跡手のテと同じく首長に対する尊称である可能性も考えられる。仮にそうだとすると、テはかなり古い時代における首長の尊称ということになるのである。それでは、雄略以後の人名の末尾のテも尊称の類いかというと、これらのなかには「地名ナテ」の例はまったくみられないので、単なる人名の語尾にすぎないであろう。

次に用例は非常に少ないが、神名の末尾につけられたテは何かというと、これは一定の神靈観を表わす語であろう。1 清之繁名坂輕彦八島手という神名についてみると、この神名は末尾に神字が付せられていずに、手という字で終わっている。なぜ神字が付されていないのであろうか。それは原史料

「欠史八代」について

〔表3〕 テを末尾に含む神名・人名

〔神 名〕

番号	古 事 記	日 本 書 紀
1	天津日高日子穗穗手見命	清之磐名坂輕彦八島手
2		彦火火出見尊，火折彦火火出見尊

〔人 名〕

番号	古 事 記	分布	日 本 書 紀	分布
1	師木津日子玉手見命〔安寧〕        息長真手王  糠代比売王	安寧	神日本磐余彦火火出見尊〔神武〕 磐余彦火火出見尊，火火出見尊	神武
2			可美真手	々
3			磯城津彦玉手看尊	安寧
4			猪手	懿徳
5			菟名手	景行
6			五十跡手	仲哀
7			筑紫聞物部大斧手	雄略
8			息長真手王	継体
9			紗手媛	安閑
10			糠手姫皇女	敏達
11			酢香手姫皇女	用明
12			錦手皇女	崇峻
13			佐伯連丹経手	々
14			平群臣神手	々
15			坂本臣糠手	々
16			土師連猪手	推古
17			大河内直糠手	々
18			紀臣塩手	舒明
19			土師連八手	孝徳
20			和珥臣君手	天武
21			小墾田猪手	々
22			樟使主磐手	々
23			谷直塩手	々
24			秦造綱手	々

〔記紀にみらない人名〕

番号	人 名	分 布	出 典	備 考
25	多呂命	崇 神	常陸風土記	長織部の遠祖
26	小保呂	応 神	播磨風土記	揖保郡
27	別君玉手	八世紀	々	々
28	衣縫猪手	々	々	々
29	蝦王部大手	々	姓 氏 録	蝦部の祖
30	麻呂臣	々	姓 氏 録	米井宿禰の祖
31	糠手直	々	姓 氏 録	蚊屋宿禰、蚊屋忌寸の祖

にも神字がついていなかったからであるが、もう一つの理由は、末尾のテそのものが神靈観を表わす語であるがゆえに、さらにその下に神字を付加する必要がなかったからである。たとえば、ワタツミ、ヤマツミの下に神という字やカミという語がついていなくても、ワタツミ、ヤマツミだけで海の精霊、山の精霊を意味する神名として独立できるのは、末尾のミ自体が神靈観を表わす語であるからにはかならない。清之繁名坂輕彦八島手という神名に神字がついていない理由も、テそのものがミ同様に一定の神靈観を表わす語だからであろう。したがって、ホホデミという神武の名は、稻穂を意味するホホの下に、神靈観を表わすテとミを二つ重ねて、稻穂の精霊の力を強調したものであるといえる。要するに、ホホデミという名は人名ではなくて神名なのである。

神武には(1)イハレヒコ、(2)ホホデミ、(3)トヨミケヌ・ワカミケヌ、(4)サノという四種類の名があり、そのうち(2)・(4)についてはその名の末尾のテ、ミ、ヌ、ノという語に着目して、神名であるということを論じてきたわけであるが、次に(1)のイハレヒコについて述べてみたい。イハレヒコは(2)・(4)の名にくらべると、かなり異質な名である。すなわち「地名(イハレ)＋尊称(ヒコ)」というふうに、首長の称呼に特有な構造を有していることは、もともとイハレヒコが神名というより磐余地方の伝説的な首長ないしは英雄の名であったことを物語っている。それにホホデミ、ミケヌ、サノのテ、

ミ、ヌ、ノは何らかの神霊概念を表わす語ではあっても、男女の性別までは表わしていないのと違って、イハレヒコのコという称号は、イハレヒコが男性であることを明示しており、イハレヒコはホホデミなどにくらべ、はるかに人名風な名であるといえる。人名風なイハレヒコと、神霊名のホホデミ、ミケヌ、サノは、もともと無関係な存在であったが、それがのちに結びつけられていったのである。

磐余地方の伝説的英雄イハレヒコとその物語をもとにして、初代の天皇とその建国の物語を形づくっていく過程で、大和やその周辺の神話や伝承が利用されたことであろう。その際、ホホデミ、ミケヌ、サノという名の神の神話・伝承が吸収された結果、これらの神名がイハレヒコの「譯」、「亦の名」、「年少時之時」とされるに至ったものと推測される。イハレヒコは伝説上の人物にすぎないのか、あるいは大和朝廷の記憶に残っていた実在の首長であるのか、にわかに決したい問題であるが、どちらかというところの可能性が強いように思われる。なお、神武の諡号の頭についているカムという語は、のちに付加された一種の美称に違いないが、カムという語が冠されたわけは、神武の系譜が神代に直結しているという理由のほかに、イハレヒコという人名にホホデミ、ミケヌ、サノなどの神名が結合された結果、神武に稲穂や食物の精霊としての神的性格が一段と濃厚になったことに理由するのであろう。

### (三) 綏靖天皇の諡号

第二代綏靖の諡号は神沼河耳といい、末尾にミを二つ重ねたミミという語がついている。先に記したように、ミ、ミミには神名の末尾についてある神霊観を表わす場合と、人名の末尾について首長や巫覡に対する尊称となっている場合との二通りの用法があるが、綏靖の諡号のミミはそのいずれであろうか。私は前者であると思う。というのは綏靖に水神的な性格がみられるからである。

まずヌナカハという名前自体が、「神聖な河」あるいは「神聖な泉（カハには泉の意味がある）」という意味を有することからして水と関係が深いのであるが、生母や曾祖父も水と深いかわりを持っている。母は伊須気余理比売といい、『記』によると、その家居は「狭井河の上」にあったと記されている。伊須気余理比売の原像は、河のほとりで神を祭り、神の子を生み育てる巫女であろう。母方の曾祖父は三嶋溝櫛耳神といい、これはその名からして溝の神であることは明白であり、しかも綏靖と同じくミミを含んでいる。こうした母や曾祖父の性格や語尾が、ヌナカハミミという名にうけ継がれていることは間違いない。綏靖は神武と親子関係に結ばれる以前に、三嶋溝櫛耳神との系譜関係を有していたのではなからうか。それはともかく、綏靖に水神的な性格が濃いことは否定できない。したがって、ヌナカハミミのミミは首長の尊称ではなく、聖なる河ないしは泉の精霊を意味

する語である。なお、ヌナカハミの上に冠されているカムは、神秘性を強調する美称であるが、カムが付加されたわけは、綏靖自身が河の精霊であるという理由のほかに、大物主神『紀』では事代主神の孫、三嶋瀧櫛耳神の曾孫として、神代に直結した存在であったからにはかならない。要するに、ヌナカハミは人名ではなく、神名である。さらにその神名の上にカムという一種の美称が付用されて綏靖の諡号は形成された。それにしても綏靖の諡号はカムといいヌナカハミミといい、九代のなかでもとりわけ神名臭の残る諡号といえる。

#### (四) 安寧天皇の諡号

第三代安寧の諡号は師木津日子玉手見、磯城津彦玉手看である。まず下半部のタマテミについて述べると、これは神武のホホデミ(ホホ・デ・ミ)と同じく、タマ・テ・ミという三つの語からなりたっていると思うが、タマテとミの二語で構成されているとする説もある。本居宣長は『古事記伝』(巻二一)のなかで、「玉手は、今河内国安宿郡に、玉手村玉手山あり、此地名なるべし……大和国葛上郡にも、玉手岡あり、孝安天皇の御陵地なり、されど其処には非じ、見は耳と同くて尊称なり……又此御名、玉は美称にて、手見は、日子穂々手見などの手見かとも思はるれども、是は然にはあらじ」と述べている。また最近では、原島氏が「タマテは地名

ともみられるがその父や伯父の名から考えて、タマは玉、テは麻で・にぎてなどと同じで、結局タマテⅡ玉類・玉でつくられたものという美称とすべきだろう」といわれている。私は宣長の地名説は原島氏が批判されたごとく、成立しがたいと考えるが、それでは原島説はどうであらうか。

そこで『時代別国語大辞典』上代編の「て」の項を開いてみると、「て 接尾語。……⑤もののあり方・種類(材料・産地)をあらわす語について、その類いのもの・製のものであることをあらわす」として、「⑤はいく種類もありうる中の一つをてと取り出しているもので、たとえば『松のつまで』は松の角材であるもの、『物部の八十手』は物部の多くの者、『伊豆手舟』は舟の伊豆製のものの意である」という説明が加えられている。これは原島説の「て」の説明にきわめて近い。よってタマテは「玉類・玉でつくられたものという美称」であり、タマテとミよりなるとする原島説はかなり有力な説といえる。

しかしながら、タマ・テ・ミの三語に分けてその意味を考察することも不可能ではない。すなわちタマは神秘的なとか、玉のように美しいとかいう意味の美称、テとミは前に述べたようにいずれも神靈観を表わす語で、テとミを重ねて神靈性を強調したものとみれば、タマテミは「神秘的な神靈」という意味の神靈名であると結論できる。また、原島説のようにタマテとミに二分する立場に立ったとしても、「玉でつ



くられたもの（タマテ）の神靈（ミ）というふうに解することが出来る。つまり、タマテ・ミ、タマ・テ・ミいづれの分けかたをしても、結果的にはタマテミは神靈名であるということになるのである。したがって、安寧の諡号の下半部のタマテミは、もともと神名であって、安寧の実名などではありえないのである。

次に諡号の上半部のシキツヒコについて述べる。シキツヒコのシキが大和の磯城、河内の志紀いづれであるとしても、「地名+ヒコ」という構造の名であることにかわりはない。「地名+ヒコ」という構造を有するシキツヒコという名は、神名風であるというより人名風であり、シキ地方の首長の名としてふさわしい。すなわち、下半部のタマテミは神名であり、男神か女神かも不明確である（テ、ミは神靈観を表現する語であるが、性別までは表現しない）のにくらべ、上半部のシキツヒコは人名風であり男性（ヒコ）であることが明示されていて、両者は名前の性格が根本的に異なっている。ということとは、シキツヒコタマテミという安寧の諡号は、性格の異なる二つの名をつなぎ合わせてつくられたことを物語っている。

シキツヒコはシキの首長の名にふさわしいとはいっても、安寧が実在したことを意味しない。シキツヒコという名は、安寧の母が師木県主の女であったことに因む名であろう。師木県主氏所生の天皇は安寧、懿徳、孝昭、孝安と四人もいる

のに、安寧だけがシキツヒコを称しているのは、この天皇が師木県主氏所生の最初の天皇であることを強調するためにほかならず、安寧がシキ地方の実在の王者であったからではない。

#### （五） 懿徳天皇の諡号

第四代懿徳天皇の諡号は大倭日子鉏友、大日本彦鉏友である。上半部のオホヤマトヒコは後世の架上であるから、ここでは下半部のスキトモについて考えてみる。スキトモという名は神名にはみえず、わずかに人名に鉏友耳建日子という吉備氏の祖先の名が『記』に記されているにすぎないが、スキトモとはいかなる意味の名であろうか。『古事記伝』（巻二十一）は、「鉏は師木なり……、友は登毛志と云言にて、美称なり」と解釈している。しかし、鉏のキは甲類、師木のキは乙類であるから、宣長の意見にはしたがえない。スキトモのスキは農具のスキであろう。その下のトモについても宣長の説は納得しがたい。トモはツミ（ツは助詞、ミは神靈を表わす語）の音転ではあるまいか。つまりもとの名はスキツミで、鉏の精霊を意味する名ということになる。するとスキトモは実在した天皇の名というより、農耕と関係の深い神名であり、スキトモには、『出雲国風土記』にみられる「童女の胸鉏取らして」出雲の国を造ったという八束水臣津野命の国引神話や、「五百つ鉏の鉏猶取り取らして天の下造らしし」

大穴持命の国造り神話と類似の神話が、内包されていたのではないかと推測されるのである。

## (六) 孝昭天皇の諡号

第五代孝昭天皇の諡号は御間津日子訶惠志泥、観松彦香殖稻である。上半部のミマツヒコのミマが地名であるとする、イハレヒコ、シキツヒコと同様に、地名の下にヒコを付して首長の称呼としたものといえる。ミマツヒコを称する例は、『播磨国風土記』に大三間津日子、弥麻都比古、『延喜式』「神名帳」に御間都比古神社（阿波国名方郡）、『国造本紀』に観松彦色止命（阿波の長国造の祖）がみえる。このうち御間都比古神社、観松彦色止命のミマは、おそらく阿波国美馬郡の地名に因むものであろう。そうすると、孝昭のミマも地名の公算が低くないといえる。履中の子に御馬王<sup>ミマ</sup>御馬皇子というものがあるが、この御馬も地名であろうか。雄略二年一〇月丙子条には御馬瀬（吉野郡）なる地名がみえる。

しかし、ミマは地名ではなくて美称ないしは尊称とみることもできる。『魏志』倭人伝によると、投馬国の「官」に弥馬升、弥馬獲支というものがみえ、これは首長に対する尊称と推察されるからである。『魏志』に記された古い尊称ミマが、はるか後世の『肥前国風土記』逸文にもみえることは注目してよい。肥前国彼杵郡健村の土蜘蛛は名を健津三間といい、これはまさに「地名（健）＋ミマ（尊称）」の構造を有

する名であり、イハレヒコ、ヤマトネコなどと同じ「地名＋尊称」の類型に属するものにはかならない。それに名の末尾につく尊称は、彦坐王、彦猿嶋命のようにしばしば名の頭に冠されて美称としての働きをするのと同様に、ミマは尊いとか神聖なとかいうような意味の美称でもあろう。

ミマツヒコのミマが地名だとすれば、ミマの首長の称号らしくみえる。しかし、美称であるとすれば、ミマツヒコは尊い立派な男を意味する名（首長に対する一般的な称号）、神聖な男神を意味する名というぐあいに二通りに解釈でき、人名、神名いずれとも決しがたい。しかし、ミマツヒコが神名であるとしても、人格神化された神名であり、ホホデミ、ヌナカハミミ、タマテミのように性別すら不明確な神名にくらべ、よほど発達した段階の神名である。私は孝昭の諡号はカエシネという古い神名の上に、首長の一般的な称号であったミマツヒコを付加することによって、いかにも天皇の諡号らしくみえるように作られたものであると考える。

次に下半部のカエシネについて述べよう。カエシネのカエはいかなる語かよくわからない。シネは稲のことであるとすると、シ・ネに分けてネは神名・人名の末尾につくネと同語とみる説とがあるが、後者が妥当であらう。そこで、まずシについて考えてみる。溝口氏によると、カエシネのシは須佐之男命の四世孫という八島土奴美神（清之湯山主三名狭漏彦八嶋<sup>ハヤヒ</sup>彦）、邇邇芸命の母万幡豊秋津師比売命のシと同語

「欠史八代」について

〔表4〕 ネを末尾に含む神名・人名

〔神 名〕

番号	古 事 記	日 本 書 紀
1		湍土根尊
2		沙土根尊
3	阿夜訶志古泥神	惶根尊, 吾屋惶根尊, 青櫃城根尊
4	天津日子根命	天津彦根命
5	活津日子根命	活津彦根命
6		正哉吾勝速日天忍骨尊 正哉吾勝速日天忍穗根尊
7	阿遲鉏高日子根神	味耜高彦根神
8	天之都度閑知泥神	
9	遠津待根神	
10	久久紀若室葛根神	
11		天之葺根神
12		天津彦根火瓊瓊杵根尊
13	天一根	

〔記紀にみえない神名〕

番号	神 名	出 典	備 考
14	天忍穗長根命	山城風土記	逸文。宇治郡木幡社の祭神
15	須美禰命	出雲風土記	仁田郡海潮郷
16	大汝少日古根命, 少日子根命, 少比古尼命	播磨風土記	飭磨郡, 揖保郡, 神前郡
17	天兒屋根命, 天乃古矢根命	姓 氏 録	中臣酒人連, 中村連等の祖
18	天道根命, 天道尼命	々	滋野宿禰, 大村直の祖
19	天押穗根命	々	弓削宿禰の祖
20	忍坂坐生根神社	神 名 帳	大和国城上郡
21	田立建埋根命神社	々	石見国邑智郡
22	忍骨神社	々	豊前国田川郡

[人 名]

番号	古 事 記	分 布	日 本 書 紀	分 布
1			劔根	神 武
2	常根津日子伊呂泥	安 寧	常津彦某兄	安 寧
3	御真津日子訶惠志泥命	孝 昭	觀松彦香殖稻尊	孝 昭
4	蠅伊呂泥	孝 靈	姪某姉	孝 靈
5	大筒木垂根王	開 化		
6	讃岐垂根王	々		
7	伊理泥王	々		
8			飯入根	崇 神
9			十市根	垂 仁
10			日向髪長大田根	景 行
11	神大根王	景 行	美濃国造神骨	々
12	建忍山垂根	成 務		
13	島垂根	応 神		
14	多遲摩斐泥	々		
15	沙祢王	々		
16	根臣	安 康	根使主	安 康
17			小根使主	雄 略
18			齒田根命	々
19			韋那部真根	々
20			河内三野県主小根	々
21			根王	継 体
22			物部伊勢速父根	々
23			巨勢德禰	孝 德

[記紀にみえない人名]

番号	人 名	分 布	出 典	備 考
24	彌比加尼	神 武	姓	吉野連の祖
25	可美乾飯根	崇 神	姓 氏 録	出雲臣の祖
26	豊玉根	々	国 造 本 紀	初代波久岐国造
27	神門臣古禰	景 行	出雲風土記	出雲郡・健部の祖
28	屋主乃禰	応 神	々	初代道奥菊多国造
29	宇佐比乃禰	々	々	初代道口岐閉国道
30	根日女	清 寧	播磨風土記	賀茂郡檜原里条

「欠史八代」について

番号	人 名	分 布	出 典	備 考
31	神門臣伊加曾禰	不 明	出雲風土記	神門郡条
32	但馬国造阿胡尼	々	播磨風土記	飾磨郡英保里条
33	阿曾禰連	々	姓 氏 録	尾張宿禰の祖
34	大美和都禰	々	々	工造の祖
35	田根連	々	々	犬養の祖
36	大見尼	々	々	目色部真時の祖
37	武旻根	々	々	石作連の祖
38	保都禰	々	々	日下部首の祖
39	彦振根	々	々	倭川忌寸の祖
40	意富禰足尼	々	々	賀茂朝臣の祖
41	千禰足尼	々	々	々
42	大矢口根大臣	々	々	饒速日命四世孫
43	佐比禰足尼	々	国 造 本 紀	島津国造の祖

で、「巫鳥<sup>しと</sup>々々」(天武紀)のシとも同じで、サ(神稲)と同一語源の語らしく、下のネを形容する、神聖なといった意味の語であろうといわれている。<sup>(17)</sup>優れた見解であると思う。なお、『魏志』倭人伝に弥馬升という邪馬台国の「官」名がみえるが、弥馬升の「升」は問題にしているシと同語の可能性もある。そうすると、この場合はシが首長の尊称として用いられていることになる。シは溝口氏が指摘されたように神聖なという意味の語であると理解してよく、それがカエシネのなかに含まれていることは、この名が神名であることを暗示している。

次はネであるが、「表4」はネを末尾に含む神名・人名の表である。

ネは神名につく例が少なくないが、人名についた用例の方が多い。ただし、ネのつく人名は継体以前に集中し、それ以後はわずかに一例分布するのみであるということが右表より知られる。このネについて溝口氏は、「ネは力強いもの、すぐれた能力をもつものにかかわる概念で、それが現実の首長に向けられた時首長の称号となり、自然に向けられた時自然に対する一種の嘆美もしくは崇拜の表現になる」「ミは先回述べたように神秘的な力によって人々の上に君臨する首長であったことから、一方のネは現実的な力によって人々を統率した英雄的首長だったのではないか<sup>(18)</sup>」と説かれている。たしかにネは神に親しい以上に人間に親近な語という感じが強い

（素佐乃乎命）  
須佐之男命

（蘇我能由夜麻奴斯弥那佐牟留比比古夜斯麻斯奴）

嶋士奴美神

（布波能母知那須奴）

稻田宮主須賀之八耳神

櫛名田比売

(伊那多美夜奴須佐能夜都美弥)

久斯伊那多比

大山津見神

木花知流比壳

[illegible]

(日河比売)

（深淵之水夜礼花）  
深淵之水夜礼花神

（意弥都奴）  
淤美豆奴神

天之都度閑知泥神  
(阿麻乃都刀閑乃知)

布怒豆怒神——  
(布努都弥美)

布帝耳神  
(布弓弥美)

刺国大神  
(佐志久斯布)

刺国若比壳  
(佐志久斯和)

(佐志久斯和可比奴壳)

〔天布由伎奴〕  
天之冬衣神

—(大國主命)  
大國主神

ようである。それでは、孝昭のカエシネのネは首長の尊称な

のであろうか、それとも神名の語尾として神靈觀を表わしている語なのであろうか。私は後者であると考えてるので、以下にその理由を述べよう。

但馬國朝來郡粟鹿神社の縁起と但馬國造神部氏の系譜を記し、『記』撰録より古い「和銅元年」の年紀を有する『粟鹿大神元記』は、あまりひろく知られていないけれども注目す

べき史料である。この『粟鹿大神元記』の冒頭に素佐乃乎命から大国主命に至る神系譜が記載されているが、『記』の須佐之男命から大国主神までの神系譜とくらべてみると、重要な相異がみられる。<sup>(19)</sup>〔系図Ⅲ〕の（ ）のなかの神名は『粟鹿大神元記』所載のもの、その隣が『記』の神名である。最大の相異点は、『記』の神名は末尾に神字がついているのに、『粟鹿大神元記』の神名にはまったく神字が付されていない。

ないということである。いま問題にしているネを含む天之都刀閼知泥神(『記』)と阿麻乃都刀閼乃知尼(『粟鹿大神元記』)とをくらべてみると、前者は神字がついているが、後者は神字がなくてネで神名が終っている。この相異は、神字のない『粟鹿大神元記』の神名が古いものととの姿をとどめていることを物語ると同時に、『記』のほうはもとの神名の下に画一的に神字が付されて成立した新しい神名であることを示している。そして阿麻之都閼乃知尼に神字がついていなくても神名として存在できるということは、ネという語自体が一定の神霊概念を意味する語であるからにはかならない。すると、カエシネのネも一定の神霊概念を意味する語で、カエシネは神名であるといつてよい。カエシネは孝昭の実名などではなく、神名であり、のちにその上にミマツヒコという首長に対する一般的な称号が付加されて孝昭の諡号は完成されたのである。

# (七) 孝安天皇の諡号

第六代孝安天皇の諡号は大倭帶日子国押人、日本足彦国押人である。上半部の(オホ)ヤマトタラシヒコはのちに架上されたもので、下半部のクニオシヒトがもとの名である。ここではクニオシヒトについて考えてみよう。クニオシを含む諡号は、ほかにも清寧の白髪武広国押稚日本根子、安閑の広国押建金日、宣化の建小広国押槌、欽明の天国押波流岐庭

があり、これら五世紀末から六世紀半ばの天皇の諡号のクニオシと、孝安の諡号のそれとの関連が指摘されている。新井喜久夫氏は、尾張連の祖瀬津世襲の妹世襲足媛が生んだ孝安の諡号と、同じく尾張連草香の女目子娘女所生の安閑・宣化兄弟の諡にクニオシという言葉が共有されていること、孝安の皇居は葛城室之秋津嶋宮と伝えられるが、尾張氏も葛城と関係の深い氏族であることなどを指摘して、孝安とその母は尾張氏によって作られたのではないかと論じられた<sup>(20)</sup>。すぐれた見解であると思う。しかしながら、新井説は尾張氏の所生ではない清寧と欽明の諡号にもクニオシが含まれていることを説明するのに十分であるとはいいがたい。クニオシヒトはまだ再考の余地が残されている。

孝安のクニオシヒトは、クニオシとヒトに分けられるであろう。クニオシを含む例は、神名では高向臣国押(『皇極紀』、国忍別命(『出雲国風土記』)、人名では高向臣国押(『皇極紀』)、田部連国忍(天武紀)があり、用例は少ないものの、神名に含まれていることは注目してよい。国忍富神(大國主神の孫)、国忍別命(須佐之鳥命の子)はいずれも出雲の神であるが、出雲の国引き神話、国造り神話とかかわりのある神名ではあるまいか。すると、クニオシヒトも国造りの神や国土の精霊の名である可能性が生じてくるが、末尾にヒトという語がついているので、これを神名とみるわけにはいかなくなる。しかしながら、左表に見られるとおり、末尾にヒトとい

〔表5〕 ヒトを末尾に含む神名・人名

## 〔神 名〕

番号	神 名	出 典	備 考
1	天熊人	紀	
2	天忍人命	姓氏録	掃守連の祖
3	天押人命	々	佐伯造の祖
4	阿目夷沙比止命	々	川枯首の祖

## 〔人 名〕

番号	古 事 記	分 布	日 本 書 紀	分 布
1			天足彦国押人	孝 昭
2	大倭帯日子国押人〔孝安〕	孝 安	日本帯日子国押人	孝 安
3	日子人之大兄	景 行	彦人大兄	仲 哀
4			盾人宿禰	仁 徳
5			許勢男人	継 体
6	忍坂日子人太子	敏 達	押坂彦人大兄	敏 達
7			阿倍臣人	崇 峻
8			古人大兄皇子	舒 明
9			三輪栗隈君東人	皇 極
10			難波吉士男人	斉 明
11			巨勢人	天 智
12			天淳名原瀧真人〔天武〕	天 武
13			路直益人	々
14			駒田勝忍人	々
15			忌部首子人	々
16			大三輪真上田子人君	々
17			粟田臣真人	々
18			紀朝臣真人	々
19			藤原朝臣史	持 統
20			大伴男人	々

## 〔記紀にみえない人名〕

番号	人 名	分 布	出 典	備 考
21	彦忍人	成 務	国 造 本 紀	初代武社国造
22	荒人	皇 極	姓 氏 録	巨勢臧田臣の祖
23	真人速公	不 明	々	中臣酒屋連の祖
24	東人直	々	々	東漢都賀直の子
25	臣知人命	々	々	伊香連の祖



う語を付した神名が存在する。

ヒトはさすがに人名に多いが、神名にも含まれている。1 天熊人は四神出生章に現われる神で、天照大神の命によって月夜見尊に殺された保食神を見に遣わされ、保食神の死体に生じた牛馬・粟・蠶・稗・稻・麦・大小豆をとって天照大神に献じたという。この話から明らかなように天熊人のクマは神に奉る米を意味し、熊人とはクマをつかさどる神を表わす名であろう。天忍人命、天押人命、阿目夷沙比止命は神とも人とも判じがたいが、アメという語が冠されているので神名とみなしてよいと思う。それから常世の国から来訪する神をマレビトとよぶが、マレビトはヒトとはいっても本来は神である。これもヒトが神靈観を表わす語であることを物語る一例となるであろう。人妻、人国のヒトも単に他人を意味するだけでなく、宗教的な禁圧や恐れを内包すると考えるべきであろう。ヒトは単に生物としての人間を意味するだけの語ではない。人名にもさかんにヒトが使われているのは、少くともヒトという語に祥瑞性がこめられているからにはかならないからである。

孝安のクニオシヒトにヒトが含まれているからといって、これを人名とみななければならないという理由はない。元来、クニオシヒトは国生み・国造り神話とも関連をもつ国土の精霊を意味する神名であったと思う。あるいは「国食人」の意で、国土を統治する神を表わす名とも解釈できる。

# (八) 孝靈天皇の諡号

第七代孝靈天皇の諡号は大倭根日子賦斗邇、大日本根子彦太瓊である。上半部のオホヤマトネコとヒコはのちに付加されたもので、下半部のフトニがもとの名である。フトニはフトとニの二語で構成されている。まずフトについて述べよう。フトは単に太いという意味にとどまらない。太占、布刀御幣、太祝詞、太手繰のように、フトは「神またはこれに準ずるものに関する名詞や動詞に複合して用いられる」語である。川副武胤氏はフトの語彙には「靈性や祥瑞性が托されてゐる」といわれている。フトニのフトにも靈性が托されているとみてよいであろう。

次にフトニのニとはいかなる語であろうか。ニは瓊、すなわち美しい玉を意味するというのがよく見られる見解であるが、それは当たらないと思う。

ニの用例は多くないが、人名では孝靈のフトニ以外になく『姓氏録』和泉国諸蕃の蜂田薬師の祖という都久爾理爾は「異国人」とあり、外国人名ゆえ除外する、他はみな神名の末尾についている。フトニを神名とみれば、ニは人名とまうたたく無縁な語といえる。ニはミ、ネ、ヌ、ノなどにくらべて用例が少数しか残らず、人名につくことが皆無である理由は、ニがかなり古層の神靈観、自然観を表わす古語であることを物語っている。このような古語と、靈性を示すフトという語で構成されているフトニという名は、人名の匂いのまっ

〔表 6〕 ニを末尾に含む神名・人名

〔神 名〕

番号	古 事 記	日 本 書 紀
1	宇比地邇神	湍土褒尊
2	須比地邇神	沙土褒尊
3	日名照額田毘道男伊許知邇神	

〔記紀にみえない神名〕

番号	神 名	出 典	備 考
4	剣刀乎夜爾神社	神名帳	伊豆

〔人 名〕

番号	古 事 記	日 本 書 紀
1	大倭根日子子賦斗邇命〔孝靈〕	大日本根子彦太瓊尊

たぐしない純然たる神霊名であると断じてよい。漢風諡号の撰定者が、孝靈という諡号を選んだ理由もわかるような気がする。

(九) 孝元天皇の諡号

第八代孝元天皇の諡号は大倭根日子子国玖瓊、大日本根子彦国牽である。上半部のオホヤマトネコはのちに付け加えられたもので、下半部のクニクルがもとの名である。クニクルという名の意味について武田祐吉氏が、「土地に綱をかけて引くといふ傳へのあつたことは、かならずしも出雲の國に限つたことでも無かつたやうである。孝元天皇の御名……そのクニクルは、國引の義で、御名の中心を成す思想である」と述べられている。至当な見解であると思う。岩波・日本古典文学大系『日本書紀・上』の「補注4―1」は武田説をさらに進めて、「孝元紀には、國引き説話は何も無く、不明であるが、何か、國引き伝説を頭において、この名を与えたものではなからうか」と推測している。

この考えをさらにおし進めていくと、クニクルは國引き神話が内包されている名であるというにとどまらず、クニクルそのものが國引きの神の名であるという見解に到達するのである。クニクルは孝元の実名というようなものではなく、國引きの神の名であらう。要するに、孝元の諡号は性別の不明確な神名クニクルがもとになり、その上にヒコを加えて男性

化し、同時に天皇を表わす称号であるオホヤマトネコを冠して、天皇の諡号らしく作りあげられたのである。

#### (十) 開化天皇の諡号

第八代開化天皇の諡号は若倭根日子子大毘毘、稚日本根子彦大日日である。上半部のワカヤマトネコとヒコは後世の架上で、下半部がもとの名であるが、『記』はオホビビ、『紀』ではオホヒヒというふうに清濁の違いがみられる。『記』の毘毘は従来、すべてビと濁音によまれてきたが、これは確固とした根拠にもとづくものではないらしい。溝口氏は「記」の毘も清音であつた可能性がある<sup>(24)</sup>といわれる。そこで、『記』の大毘毘も『紀』の大日日と同じくオホヒヒと清音によむこととする。なお、『古事記伝』(巻二十二)は「毘毘は耳と同じくて、称名なり」と解釈しているが、「毘毘」は称名の一種に違いないけれども、ミを重ねたミミとは別個の語彙である。

さて、『紀』ではオホヒヒのヒに日字を当ててはいるが、一体ヒはいかなる語であろうか。

〔表7〕にみられるように、ヒ(甲類)は神名の末尾につく例が、人名につく例よりやや多い。このヒについても溝口氏に詳細な研究がある。氏によると、ヒはムスヒのヒにしる、ハヤヒのヒにしる、すべて太陽を意味する語であり、かりに靈力を表わしている場合でも、太陽の靈力という意味に

限定されるという。また、太陽を意味するヒは、皇室の神名と人名に集中しており、これはヒすなわち太陽の崇拜が大和朝廷に固有の信仰であつたことを示している。その後、欽明、敏達朝の頃、国家統一が強力におし進められる過程で、その固有の信仰であるヒを国家的規模の信仰として強化しようとした。その名残りがこの頃の天皇の諡号に含まれたヒである。さらにヒは、南解、脱解など古代朝鮮の王名の「解」と同語で、ともに太陽を意味する語であるから、大和朝廷の支配者層の系統は朝鮮に求められるといわれる。

溝口説は構想の雄大な説といえるが、ヒはすべて太陽を意味するといわれる点は服しがたい。ヒには太陽を意味するだけでなく、さまざまな自然や物の精霊を意味する用例も少なくない。安閑、用明、舒明、孝徳、斉明の諡号のヒは、溝口氏のいうように太陽のヒに間違いないが、開化のヒは他の多くの神名のヒと同じく精霊を意味する語であろう。それにヒが太陽以外のなものでもないのなら、ヒの用字は日に統一されてしかるべきであるのに、毘、卑、比、氷、日、飯とまちまちである。また、溝口氏はヒが皇室の神名や人名に集中していることを重視されているが、皇室の神名・人名というものは、始めから皇室の系譜のなかに存在していたのではない。もともと皇室とは無関係な地方や民間の神名・人名であったものが、のちに皇室の系譜にとり込まれたもののがかなり含まれている。

〔表7〕 ヒ（甲類）を末尾に含む神名・人名  
〔神 名〕

番号	古 事 記	日 本 書 紀
1	高御産巢日神	高皇産靈尊
2	神産巢日神，神産巢日御祖命	神皇産靈尊
3	和久産巢日神	稚産靈
4		火産靈
5	甕速日神	甕速日神
6	槌速日神	槌速日命
7	八十禍津日神	八十枉津日神
8	大禍津日神	大綾津日神
9	神直毘神	神直日神
10	大直毘神	大直日神
11		速秋津日
12		勝速日命
13	天之菩卑能命，天菩比命	天穗日命
14	熊野久須毘神	熊野櫛樟日命
15	神活須毘神	
16	白日神	
17	庭津日神	
18	庭高津日神	
19	夏高津日神	
20	天忍日命	天忍日命
21		興台産靈

〔記紀にみえない神名〕

番号	神 名	出 典	備 考
22	天照高弥牟須比命	山城風土記	久世郡水渡社の神
23	味日命	姓 氏 録	久米直の祖
24	天久之行比乃命	々	桑名首の祖
25	牟須比命	々	門部連の神
26	安牟須比命	々	々
27	移受牟須比命	々	浮穴直の祖
28	玉積産日神	神 名 帳	宮中神祇官西院
29	生産日神	々	々
30	足産日神	々	々

「欠史八代」について

番号	神 名	出 典	備 考
31	意富比神社	々	下総国葛飾郡
32	大与比神社	々	但馬国養父郡
33	久流比神社	々	々 城崎郡
34	鷹日神社	々	出雲国意宇郡
35	勝日神社	々	々 々
36	神産魂命子午日命神社	々	々 神門郡

〔人 名〕

番号	古 事 記	分 布	日 本 書 紀	分 布
1	稲氷命	神 武	稲飯命	神 武
2	邇芸速日命	々	櫛玉饒速日命	々
3	飯日比売	懿 德	飯日媛	懿 德
4	意富那毘	孝 元		
5	若倭根日子大毘毘命〔開化〕	開 化	稚日本根日子大日日尊	開 化
6			活日	崇 神
7			武日	垂 仁
8	伊佐比宿禰	仲 哀		
9	波多毘能大郎子	仁 德		
10	波多毘能若郎女，長日比売	々	幡梭皇女	仁 德
11	久須毘郎女	仁 賢	樟氷皇女	仁 賢
12			白坂活日姫	繼 体
13	広国押建金日命〔安閑〕	安 閑	広国押武金日尊	安 閑
14			膳臣已提便	欽 明
15			名瀬氷	々
16			大島首磐日	敏 達
17	橘豊日命〔用明〕	用 明	橘豊日尊	用 明
18			息長足日広額尊〔舒明〕	舒 明
19			来日物部伊区比	々
20			天万豊日尊〔孝徳〕	孝 徳
21			天豊財重日足姫尊〔斉明〕	斉 明
22			弟国部弟日	持 統

〔記紀にみえない人名〕

番号	人 名	分 布	出 典	備 考
23	草野灰	景 行	陸奥風土記	逸文、土蜘蛛
24	保々吉灰	々	々	々 々
25	兄多毛比命	成 務	国 造 本 紀	初代无邪志国造
26	大布日意彌命	々	々	初代須恵国造
27	忍立化多比命	々	々	初代上海上国造
28	彌佐比命	々	々	初代高国造
29	建功狹日	々	々	初代角鹿国造
30	建日臣	不 明	姓 氏 録	坂本朝臣の祖

ところで、開化のオホヒヒとは太陽を意味する語ではなく、精霊を意味するヒであり、オホヒヒという名は、ヒを重ねて精霊の威力を強調したヒヒという語の上に美称オホを冠して、さらにヒヒの意味を強めた名であると考ええる。したがって、オホヒヒは開化の実名でもなく、安閑など後世の天皇の諡号のヒが投影された名でもない。人格神化される以前の古い神名である。この神名オホヒヒの上にヒコが付されて男神化され、同時にワカヤマトネコが冠されて天皇の諡号となったのである。

これまで論述してきたように、神武のホホデミ、綏靖のヌナカハミミ、安寧のタマデミ、懿徳のスキトモ、孝昭のカエシネ、孝安のクニオシヒト、孝安のフトニ、孝霊のフトニ、孝元のクニクル、開化のオホヒヒとは、人格神以前の古い神名であった。これらの神名は『記紀』編纂時に創作されたものではなく、帝紀の成立以前から大和やその周辺に存在し、伝承されていたものである。こうした古い神名をもとにして有史八代の諡号は作られたのであるが、その際に二つの作業が必要であった。一つは性別の不明確な神名にヒコという語を加えて男性化すること、一つはタラシヒコやヤマトネコを冠して天皇の諡号らしく荘厳化することである。それについての詳細および后妃、皇居等の問題は、次号に述べることにしたい。

注

- (1) 庄司浩「帝紀の成立についての一考察」(『歴史教育』五の四)
- (2) 肥後和男「大和朝史時代の一考察」(『史潮』一四)
- (3) 長野正「帝紀構成上の傾向とその問題」(『史潮』四二)
- (4) 笠井倭人「記紀系譜の成立過程について」(『史林』四〇の三)
- (5) 小川徹「記紀開化以前八代系譜の成立」(『史潮』八八)
- (6) 直木孝次郎「県主と古代の天皇」(『日本古代の氏族と天皇』所収)
- (7) 小林敏男「所謂『欠史八代』における県主后妃記載」(『日本歴史』三五四)
- (8) 篠弘道「古代王朝交代論」(『日本歴史』三二三)
- (9) 岡田精司「記紀神話の成立」(『岩波講座日本歴史』二、一九七五年)
- (10) 鈴鹿千代乃「『欠史八代』の意義」(『国学院雑誌』八二の一)
- (11) 溝口睦子「記紀神話解釈の一つのこころみ(中の一)」(『文学』四一の一)
- (12) 溝口睦子「記紀神話解釈の一つのこころみ(上、中の一、中の二、下)」(『文学』四一の一〇・一一、四二の二・四)
- (13) 同上
- (14) 三品彰英『日本神話論』二八〇頁
- (15) 溝口睦子「記紀神話解釈の一つのこころみ(上)」(『文学』四一の一〇)
- (16) 原島礼二『神武天皇の誕生』一三五頁
- (17) 同上
- (18) 同上
- (19) 拙稿「神話研究における『粟鹿大明神元記』の史料価値」(『学習院大学文学部研究年報』二三)
- (20) 新井喜久夫「古代の尾張氏について」(『信濃』二二の一)
- (21) 『時代別国語大辞典』上代編、六三八頁
- (22) 川副武胤『古事記の研究』四五二頁
- (23) 武田祐吉「国引の詞の考」(『出雲国風土記の研究』所収)
- (24) 溝口睦子「記紀神話解釈の一つのこころみ」(『文学』四二の二)
- (25) 同上